

## 10) 体外衝撃波結石破碎療法が有効であった confluence stone の1例

後藤 俊夫・関根 厚雄 (新潟県立吉田病院)  
 朴 鐘千 (内科)

症例は、40才、女性。人間ドックにて、胆嚢結石を指摘され、1992年10月20日初診。腹部エコー、CTでは、胆嚢は萎縮しており、胆嚢内に結石がみられた。ERCPでは、胆嚢内には造影剤がはいらず、胆嚢管にて閉塞していた。腹腔鏡下胆嚢摘出術を予定していたが、1992年11月26日より、心窩部痛、黄疸あり、11月30日入院。ERCPにて、径12×10mmのconfluence stoneと診断し、乳頭切開後、7Fr、ENBDを挿入した。体外衝撃波結石破碎装置 TRIPTER X-1を用いて、ENBDチューブから造影し、X線ガイド下に2,000発の衝撃波を照射した。結石は破碎され、後日ERCPにて、排石を確認した。我々は、総胆管結石に対してのESWLの有効性を報告してきたが、破碎効果は結石の種類のみならず、結石と胆管壁との胆汁が存在するスペースの大小が問題となる。confluence stoneは、結石と胆管壁とのスペースが小さく、破碎困難と思われたが、ドレナージより造影剤を十分に注入し、破碎に成功した。

## 11) 胆石イレウスの1例

阿部 要一・吉田真佐人  
 榊原 年宏 (木戸病院外科)  
 秋山 修宏・藤井 久一 (同 内科)

胆石イレウスは比較的稀な疾患とされてきたが、最近その報告例が少しずつ増加しつつあり、本邦では1903年以降300例余りが報告されています。我々は術前に診断できた本症の1例を経験した。症例は66歳、男性、腹痛、嘔吐、入院時腹部X線検査にて胆道内ガス像、腸管拡張像、腸管内結石像が認められ、腹部CT所見では胆嚢壁の肥厚と胆嚢および胆道内にガス像を認めた。十二指腸内視鏡検査で十二指腸乳頭の口側、SDA直下に瘻孔を認めた。胆石イレウスの診断で開腹し、Treitz靭帯から約150cmの空腸に嵌頓する2個の結石を認め、腸切開して摘出し、さらに胆嚢部分切除、胆嚢十二指腸瘻の閉鎖術を一次的に施行した。2個の結石の大きさは3.2×3.0×2.8cm、2.2×2.0×2.0cmで結石分析ではコレステロール結石でした。術後しばらく胆汁の漏出を認めたが、自然閉鎖し、全治退院した。

## 12) 超常磁性酸化鉄を用いた造影MRIによる肝腫瘍性病変の描出能の検討

加村 毅・木村 元政 (新潟大学放射線科)  
 酒井 邦夫 (同 第一外科)  
 塚田 一博 (同 第三内科)  
 市田 隆文 (済生会新潟第二病院放射線科)  
 武田 敬子 (同 内科)  
 尾崎 俊彦・太田 宏信 (同 内科)

新しい肝のMRI用造影剤である超常磁性酸化鉄(superparamagnetic iron oxide: AMI-25)を肝細胞癌9例、胆管細胞癌1例、転移性肝癌9例の合計19例に投与した。AMI-25投与により、Contrast to Noise Ratio (CNR)は向上した。切除ないし生検にて診断が確定した10例14結節について検出できた病変数をみると、転移性肝癌9結節ではAMI-25による造影前・後とも8結節を描出し得たが、描出されたsequenceの数は造影後が多かった。またUSで描出されたのは6結節、CTでは7結節であり、これらより多くの結節を描出した。肝細胞癌5結節中、血管造影で濃染され、組織学的に中分化の肝細胞癌3結節はAMI-25による造影前・後とも良好に描出されたが、血管造影で濃染のない高分化肝細胞癌2結節はいずれも造影後かえって不明瞭になった。転移性肝癌の検出目的でMRIを行う場合、AMI-25による造影は有用と思われた。肝細胞癌については、分化度の判断の一助となると思われた。

## 13) 保存的治療により軽快した胆摘術後胆汁性腹水の1例

河内 保之・岡村 直孝  
 羽賀 学・若桑 隆二  
 広田 雅行・田島 健三 (長岡赤十字病院)  
 和田 寛治 (外科)

胆道系手術後は外傷などにより胆道損傷があった場合、腹腔内に漏出した胆汁は通常胆汁性腹膜炎を引き起すが、希に大量の胆汁漏出があるにもかかわらず、急性症状を欠くことがある。このような状態を胆汁性腹水と呼ぶ。

今回、我々が経験した症例は胆嚢摘出術中に総肝管損傷があったが、術後2週間は経過良好であった。しかし、術後17病日に腹腔内への胆汁漏出が明らかとなった。腹部所見および血液検査で腹膜炎の所見は認めなかったため、2回の経皮的ドレナージを行うことにより保存的に治療し軽快した。ドレナージされた胆汁性腹水の量はtotal 3,000mlであった。